

平成31年

冬

木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

KISS

2019
Vol.
109

水門川

芭蕉も舟で下った

水門川の大垣船町川湊

地域の歴史

市政一〇〇周年を迎えた

大垣の交通と文化

歴史記録

地域と河川 第三編
郡上市の用水路

コラム

中国から来た治水神・禹王①
海津市歴史民俗資料館 水谷容子

研究資料

木曽川に育まれ、水と戦ってきた

歴史の町 笠松町

笠松町歴史未来館 学術専門員 高木敏彦

8

7

5

1

市制100周年を迎えた 大垣の交通と文化



「過去と未来の大垣市役所」と「おがっきい&おあむちゃん」
〈提供：日本郵便株式会社東海支社〉

豊富な湧水に恵まれ「水都」とよばれる大垣は、江戸時代から交通の要衝で、水門川が揖斐川舟運の拠点となっており、西濃経済の中心地でした。

また大垣城下は、美濃路の宿場としても賑わいを見せ、朝鮮通信使などの大規模な行列も通行・宿泊しました。

一方で、大垣藩は文教を奨励したので、大垣は美濃における文化の中心地としても発展しました。

なかでも船町湊は、松尾芭蕉が訪れた「おくの細道 結びの地」として名高く、さらに大垣祭の軌行事は、平成二十八（二〇一六）年にユネスコの無形文化遺産に登録されています。

水都大垣の湧水と輪中

岐阜県の西部、濃尾平野西端部に位置する大垣は、全国有数の湧水地で、豊かで清浄な自噴水に恵まれているので「水都」と呼ばれてきました。かつては、二十四時間流しっぱなしの自噴水で生活用水を賄っていた家庭も多く見られました。明治時代半ばから大垣の主要産業となった繊維産業は、この豊富な水と、揖斐川上流の水力発電が成長の原動力でした。今でも大垣城の北東に鎮座する加賀野八幡神社の井戸は、一分間に約四〇〇リットルの水が絶え間なく湧き出しており、環境省の「平成の名水百選」に選ばれています。

この湧水は大垣の水田開発に大きな影響を与えてきました。大垣の中心地域は、東を揖斐川、西を杭瀬川に挟まれた大垣輪中と呼ばれた水郷地帯です。大垣輪中は大小の輪中からなる複合輪中で、北部の古大垣輪中（狭義の大垣輪中）は、揖斐川扇状地の一部で、古代の条里制の名残りを地名にとどめる地域があり、また古代から中世にかけては東大寺の大井荘があった地域です。このように古くから開発されていた北部に対して、南部は北部から湧水が絶え間なく流入する低湿地で、近世以前は揖斐川・杭瀬川沿いの自然堤防を除いて未開発の原野でした。



大垣輪中（明治初期）



戸田氏鉄騎馬像

寛永十二年（一六三五）年、大垣藩主となった戸田氏鉄は、それまで統治した摂津尼崎において神崎川の改修、排水施設による低湿地の土地改良に実績を残しており、大垣に移った後も湿地の水田化を積極的に進めました。南部に広がる低湿地の開発には、北部から無秩序に流入してくる大量の湧水を制御し、適切に排水することが重要でした。開発する地域に堤防を巡らせ、堤外に排水河川として水門川やその支流新規川・中之江川などを整備しました。大垣輪中の南部を占める今村輪中・禾森輪中・西中之江輪中・東中之江輪中などがこの時期に形成され、九、〇〇〇石を超える大開発となりました。

開発された南部の輪中を内包する大垣輪中の形成については、最南部の横曽根新田が開発がされたのと同時期、川口と今福の間に水門が築造された承応元（一六五二）年をもって、尻空き部分が完全に閉め切られ懸廻堤が完成したとされています。



加賀野八幡神社の湧水

水門川の舟運

北部から流入する湧水を排水する河川として整備された水門川は、市街地を屈曲しながら南流し、揖斐川に注ぐ延長十四・五キロメートルの河川です。永禄四（一五六一）年、大垣城主氏家直元が、斉藤龍興の命によって開削したと伝えられています。これは従来からの悪水落の川を、排水を良好にするために改修したものと想われます。その後、城下町の外濠として、町割りに直行するよう改修されました。この頃から揖斐川の河床が上昇して、増水時に水位が上がり、逆水が大垣城下に侵入するようになり、寛永十三（一六三六）年、戸田氏鉄が川口・外濠村境に樋門を設けました。これが水門川の名前の由来とされています。

湧水を水源とする水門川は、年間を通して流量が安定し、流れが緩やかなので、舟運に適していました。船町湊は慶長六（一六〇一）年から木村與次右衛門が依町から移って小舟を利用して舟運を営んだのが初めて、慶長十九（一六一四）年には倉庫が建設され、船問屋が成立しました。元和六



水門川（映画「聲の形」のモデル地・美登鯉橋）



舟運でにぎわった船町湊（提供：大垣市役所）

（一六二〇）年に杭瀬川と水門川を結び水路が開削されると湊はさらに発展し、船町周辺には当時七十軒余の家屋が建ち、寛永十三（一六三六）年には一〇〇軒を超える町並みとなっています。

元禄十一（一六九八）年には改修工事が行われ、舟運の便が一層良くなりました。この頃は日本の物流が全国的に充実していた時期で、東廻り、西廻りの海運、琵琶湖水運、淀川水運、利根川水運などが発展しました。大垣は海に面していませんが、揖斐川を通じて桑名湊と連絡していたので、江戸・大坂との物流の利便性に優れた立地でした。揖斐川支流の水門川に設けられた船町湊は、西美濃における物流の拠点として、この地方の米・菜種油・茶・酒などを移出、一方で陶器・海産物などの生活物資が移入されました。明和八（一七七二）年に常夜燈ができ、川湊としての機能が充実、大垣城下に集散する物資のほとんどがこの水運に頼っていました。

明治十六（一八八三）年に、大垣・本阿弥・桑名などの有志が資金調達した濃勢講社が蒸気船を、大垣―桑名間に就航、福栄・今尾・

駒野・高須などに停船場を設けました。就航後、船が水門川の堤防に障害を与えたために紛争がおこり、会社側が保証金を支払っています。明治十七（一八八四）年には、大垣乗船会社が設立され、大垣―桑名、および四日市―名古屋間の汽船・和船での乗客・物資の運送を行いました。会社の持ち船は六艘で、乗客定員は五十人前後で、乗組員は四人でした。

明治二十年代、大垣―桑名間の汽船は、川底が浅いため夏場の水の少ない時期になると運行できない状態が続いていました。明治二十二（一八八九）年の新聞記事に「小汽船の往復は、夏期の水の少ない時期はできなくなり、春冬の満水の頃でも十分にできなくなつた。（中略）大垣の有志者一〇人は、船腹を浅くしたうえに船体を軽くした一艘の小汽船を新調して試運転を行い、余程減水しない限り通行可能であることを確かめた」とあります。明治二十三（一八九〇）年の新聞には、「大垣桑名間の川蒸気船は、目下余程繁盛するよし」の記事が載っているため、船の通行がうまくいきだしたことが伺えます。

明治四十二（一九〇九）年には、濃勢汽船会社が設立され、二十トン程度の汽船六艘を持ち、大垣と桑名から一日三回発船、停船所を水門・福栄・塩嶺・根古地・今尾・駒野・高須・山崎・太田・帆引・今島・上ノ郷・桑名に置きました。ただ、川の各所に堆積する土砂により川底が浅くなる問題は続いたので、揖斐川航運社という別会社を設け、通行税を徴収して河川の浚渫費にあてました。

本曾川下流改修後は、揖斐川の水位が低下し、船の航行に支障をきたすこともありましたが、大正五（一九一六）年時点で大垣に入りする船舶は一日平均約八十艘に上りました。名古屋・四日市・桑名の港から、石炭・陶器・煉瓦・土管・魚・青物・果実・その他の雑貨が移入され、雑穀・セメント・原石・石灰などが移出されていました。大垣―桑名間の客船は一日二往復が運

行され、沿岸地域の人々に利用されていました。

しかし、その頃から、旅客は圧倒的に鉄道の利用者が多くなり、貨物についても、大正十（一九二一）年になると極端に減少しました。昭和二十五（一九五〇）年頃には、潮干狩りのための船が桑名に行く程度になり、間もなくそれも姿を消しました。



水門川を下るたらい舟（提供：大垣市役所）

脇往還・美濃路と朝鮮通信使

水門川の舟運とともに、大垣を東西交通の要衝として発展させたのは、中山道の脇往還・美濃路です。江戸時代の主要道は、江戸を起点とした五街道が整備され、大垣では北部を中山道が横切りました。垂井宿の東はすれで中山道が分岐して東海道熱田宮宿に至る脇街道が美濃路で、約五十八キロメートルの間に、大垣・墨俣（大垣市）・起（一宮市）・萩原（一宮市）・稲葉（稲沢市）・清須（清洲町）・名古屋の七宿が設けられていました。平安時代中期から京と東国を結び経路として通行が多くなり、鎌倉時代には、垂井―赤坂（大垣市）―墨俣―黒田（本曾川町）の経路が発達、鎌倉街道とよばれました。

織田信長は天正三（一五七五）年、清須から京への道を並木松を植えるなど整備し、



大垣宿本陣跡

豊臣秀吉は文禄三（一五九四）年に京から清須までの伝馬を定め、人馬の調達について朱印状を出しています。徳川家康も上洛の際にはこの経路を使い、美濃路として整備された以降には、秀忠・家光・家茂が上洛にこの道を通っています。

京―江戸間を往来する旅客にとって、東海道を利用する場合、「八丁七曲」といわれた長く屈曲した鈴鹿峠と、伊勢湾の海上を渡航する「七里の渡し」は難所でした。一方、中山道は木曾の険しい山中を通行しなければなりません。美濃路は両道を結んで、この難所を避ける経路として機能しました。京―垂井宿間は中山道をつかい、垂井宿―熱田宮宿間は美濃路を通ることで、二つの難所を回避して東海道を利用することができ、美濃路は利用者の多い街道となっていました。

難所の少ない美濃路は、大名行列などの大規模な通行にも多く利用されました。中でも朝鮮通信使の通行は、規模と格式において特別なものでした。朝鮮通信使は、朝



おおがき大パレードの朝鮮通信使行列 〈提供：大垣市役所〉

鮮王朝が日本に遣わした外交使節団で、慶長十二（一六〇七）年にはじまり、初期の五回は日朝両国間の政情や東アジア情勢に関連するものでしたが、明暦以降は「日本將軍襲職祝賀」となり、文化八（一八一）年の第十二回まで続きました。国王の親書を携えた使節団は、プサン（釜山）を発って対馬を経て大坂に到着し、江戸下って、江戸城で国書・進物が渡され、將軍から返書が返されました（第十二回は対馬で応対）。

第一回より通行には美濃路から東海道に入る経路が使われ、往路復路とも大垣での宿泊が恒例となっていました。大垣での宿泊地について、第一回が宗画寺、第三・四回は花林寺、第六回以降は船町の全昌寺を定宿としたと記録されています。幕府は、通信使を国賓級の扱いで応接したので、あえて大名が宿泊する本陣を提供せず、各地の格式ある寺院を宿泊施設に充てました。

定宿となった全昌寺は、戸田氏鉄が慶長年間に建立、大垣移封に伴い、一時は鷹匠町辺りに移されましたが、慶安四（一六五）年、船町に敷地を賜り伽藍が造営されました。現在、境内の北側にある山門が、通信使の一行は、毎回三〇〇〜五〇〇人にもおよぶ大人数で構成されていました。そのため、一行が通行する沿道の領主は、多数の船や人馬を手配し、警護や送迎・接待を担い、武士のほか多くの町人・農民が動員されました。美濃路は大垣―墨俣宿間で揖斐川と交叉するので、沢渡村（大垣市東町）と西結村（安八町西結）とを連絡する沢渡の渡し場が設けられていました。普段は舟が行き交うこの渡し場に、通信使通行時は臨時の船橋が架けられました。第八回の時の記録によれば、大垣藩が三十艘、笠松代官所が五十艘の船を調達し、船の舳先を上流に向け鉄碇と石碇を交互に用いて上流側に固定、下流側は三艘ごとに一つの石碇で固定しました。船の上に板を並べ、それらを兩岸の杭に結びつけた綱で繋ぎました。第十一回の記録では、船乗人足一〇〇人・艀五十挺を近郷四十四の村に割り当てたとされています。



全昌寺

かつては東側にあって前面を水門川が流れており、通信使の来訪時には川に船橋が架けられ、美濃路からこの橋を渡って境内に入ったそうです。

平成二十九（二〇一七）年十月、ユネスコは、朝鮮通信使が豊臣秀吉の朝鮮侵攻によって途絶えていた両国の外交関係の回復や、平和的な関係の維持に貢献したとして、「世界記憶遺産（世界の記憶）」への登録を決めました。通信使との関わりが深い大垣市では、平成三十（二〇一八）年十月に「大垣と朝鮮通信使」展を開催、古文書・絵画・工芸品などの資料を交え、その歴史を紹介しました。

城下町大垣の文化

美濃路の大垣宿は、戸田十萬石大垣城の城下町の町屋地区とほぼ一致していました。大垣城は内濠と外濠に囲まれ、七口の門によって城外に通じ、門の内部に武家屋敷三十二か町、外部に町家十か町から成っていました。城下を通る美濃路には名古屋口門と京口門と呼ばれる総門があり、大垣藩は、美濃では尾張藩領に次ぐ石高を有する大藩で城下に居住する武家の数も多く、通行量の多い美濃路の宿場町でも



大垣城

あったので町は大変賑わいました。くわえて揖斐川の舟運によって物流拠点の役割を担ったので、商工業の伸長も著しく、大垣は西美濃の経済の中心として発展しました。

一方で、大垣藩は戸田氏鉄をはじめ歴代藩主が文教を奨励したので、学問・文芸が大きく隆興し、大垣は美濃における文化の中心としても発展しました。学問では儒教の徂徠学派・折衷学派・陽明学派、心学、国学が発展、文芸では漢詩、俳諧が盛んになりました。

俳諧は、京の北村季吟門下で松尾芭蕉と同門であった谷本因の指導のもと、藩士や町人を中心に盛んで、さらに芭蕉の来遊は、大垣俳壇に活力を吹き込みました。芭蕉が最初に大垣を訪れたのは貞享元（一六八四）年「野ざらし紀行」の旅程で、以降三度大垣に来訪しています。元禄二（一六八九）年三月、芭蕉は江戸を発ち、日光から奥州・出羽・北陸を巡りました。約五か月の旅の終わりに、船田湊で「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」と詠んで「おくの細道」を結び、舟で桑名に下りました。船田湊は国名勝「おくの細道の風景地」に選ばれています。



芭蕉翁と木因翁像



大垣まつりの軸 <提供：大垣市役所>

大垣町屋の繁栄を象徴する文化財として、八幡神社の例大祭の軸曳き廻し行事があります。祭り行列の出し物で車輪を備えた構造物は、地域によって山車・鉾・屋台などさまざまな呼称があつて、大垣では軸と呼んでいます。正保五（一六四八）年、社殿の完成を祝賀し、十か町がそれぞれ軸を出したと伝わり、延宝七（一六七九）年、藩主戸田氏西から「神楽軸」「大黒軸」「恵比寿軸」の三両軸を賜り、これを機に十か町は軸の装飾に趣向を凝らして絢爛豪華な造作にしていきました。

藩主から拝領した三輦軸は、簡素な単層露天型式の山車で、各町が持ち回りで曳行します。十か町の持ち軸を本軸と呼び、このうち二軸は前方に屋根付き舞台を持つ形式をとり、かつては子供歌舞伎が、現在は子供による手踊りが行われています。ほかの八軸は正面上層にからくり人形を備え、能に取材した囃子などに合わせて、各種のからくりが演じられます。こうした構造や出し物について、前者は主に滋賀県長浜市の長浜曳山祭りの舞台型式、後者は愛知県

の名古屋を中心とするからくり山車の型式との共通性がみられ、大垣の地理的な条件から、東西の祭礼文化を取り入れつつ独自の様式を形成してきたことがわかります。東西の祭礼文化と藩主下賜の軸が残ることが評価され「大垣まつりの軸行事」として国指定重要無形民俗文化財となり、平成二十八（二〇一六）年にはユネスコの無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」に登録されました。

大垣の未来プロジェクト

交通の利便性と文教政策によって、商工業と文化を発展させてきた大垣では、岐阜県のスィートバレー構想の中核施設「ソフトピアジャパン・センタービル」が平成八（一九九六）年にオープン。以降、情報産業の集積に向けてソフト・ハードの両面で誘致・支援が進められてきました。

平成三十（二〇一八）年、大垣市は正七（一九一八）年の市制施行から一〇〇周年を迎えました。市では一〇〇周年記念事業として、四月一日のオープニングセレモ



新庁舎のイメージ図 <提供：大垣市役所>

ニーを皮切りに、ギネス世界記録に挑戦やロボカップジャパンオープン二〇一八のほか朝鮮通信使行列や十万石ふるさとまつり神輿パレードなどが参加した「おおがき大パレード」、大垣まつりの軸が駅前大通りに勢揃いした「大垣祭軸特別曳揃え」、ソフトピアジャパンエリアで「おおがき未来フェスティバル」などの一〇〇事業を実施しています。

一〇〇周年の区切りの年に、新たなまちづくりの指針「大垣市未来ビジョン」がスタートしました。「みんなで創る 希望あふれる産業文化都市」を目指し、安全・安心で暮らしやすいまちづくりに取り組んでいます。

また、平成三十一（二〇一九）年度完成予定で市庁舎の建設が進められています。誰もが快適に利用でき、防災拠点として市民の安全・安心を守る新庁舎が期待されています。新庁舎建設に併せて、水門川の親水護岸や隣接する新丸の内公園を一体的に再整備する事業が、国土交通省の「地域と連携した川づくりに係る事業（かわまちづくり）」に登録されました。市のシンボルである庁舎を中心に観光拠点を整備し、市街地の回遊性の向上、イベントなどの開催により、賑わいの創出を図っていきます。

■参考資料

『大垣市史 通史編 自然・原始～近世』	平成二十五年	大垣市
『大垣市史 通史編 近現代』	平成二十五年	大垣市
『大垣市史 輪中編』	平成二十年	大垣市
『大垣市史 民俗編』	平成二十年	大垣市
『大垣市史 通史編 近現代』	平成二十五年	大垣市
『日本地名大辞典・岐阜県』	昭和五十五年	角川書店
『岐阜県の地名』	平成元年	平凡社
『輪中―その形成と推移―』	昭和六十三年	安藤萬壽男

地域と河川 第三編 郡上市の用水路

本曾三川下流域を潤す用水路は、幹・支線水路長一、一〇〇kmの愛知用水を初め、犬山頭首工などの巨大な堰で取水され、各地へ分水されています。一方、上流域では、わずかな平地をも灌漑する努力が弛まなく行われ、地域の人々の生活と密着した多くの用水路が設置されました。

本編では、寛文年間（一六六一～一六七二）から使用されてきた、長良川最上流部に位置する郡上市白鳥町の剣用水と、郡上市南端に位置する美並町の美並用水について紹介します。



福野隧道の内部。現在はコンクリートで補修されている。

一. 新田開発の始まり

正保三（一六四六）年、郡上藩三代藩主となった遠藤常友（一六二八～一六七六）が諸政を行った三十年間の内、寛文年間（一六六一～一六七二）には全国的に人口が増加し、経済も安定して、各藩が盛んに新田開発を行った時期でした。

郡上郡（天領の和良村を含む）の石高は、正保二（一六四五）年に一五二ヶ村で二六、七〇六石から、元禄十四（一七〇一）年には一六五ヶ村で二九、九三六石となり、五十五年間に新田開発で三、二三〇石も増加しました。

新田開発は、それぞれの耕地の地続きを開く「切添新田」の他に、領主側で資金を支弁する「藩開発新田」、村人が協力して開く「村請新田」、さらに町人が資金を出して行う「町人請負新田」に大別されます。

時の領主常友は、土木の才に富んだ高田関左衛門を殖産事業を担う新田奉行に任命し、さらに耕地の設計に優れた種村市左兵衛が関左衛門の助力者となりました。

寛文五（一六六五）年、常友は、大坂から水翁（『白鳥町史上巻』では「京都より水舌」と記載）という土木技術者を招き、新田奉行関左衛門は福野（現郡上市美並町白山）の新田開発を始め、各地の新田開発を行いました。

寛文年代の主な新田開発としては、寛文二（一六六二）年に村請で場皿村新田（大和町場皿。三十三石余）を、八幡町本町の酒屋二名は万場村新田（大和町万場。三十五年後に二〇三石余）を、さらに八幡町大



高田関左衛門の碑
（白山神社内）

手町の二名は坪佐村新田（八幡町坪佐。三十石余）を開きました。

また寛文四（一六六四）年には、八幡町大手町の二名が五町村方新田（八幡町五町。十六石余）を、八幡町鍛冶屋町の二名が中津屋村新田（白鳥町中津屋。六十九石余）を、さらに剣村新田（大和町剣。三二〇石余）が村請で開かれ、寛文六（一六六六）年には福野新田（美並町福野。一〇六石余）が領主見立てで完成しています。

これらの新田を潤した剣用水と美並用水について紹介していきます。

二. 剣用水

郡上市内の耕地は小さな谷沿いにも散在し、多くの大小の用水路が古くから設置されてきました。次ページの図は、高鷲町の用水路十八本と白鳥町の用水路十六本の分布で、図示以外の用水路も多く点在しています。

例えば、大和町では、図示以外で役所の台帳に記されている水路は一六九本を数え、この内、約一〇〇本以上が現在も使用されていると考えられています。

同じように、白鳥町の用水路も図示した以外に多く存在すると推測され、『白鳥町史下巻』が列挙している二十一本の用水路は、殆どが江戸時代やそれ以前、さらに古く鎌倉時代にも設置されており、灌漑面積が四〇五十ha未満の用水路が十七本と大半を占めています。

五十ha以上を灌漑する用水路は、①寛永二（一六二五）年に設置された那留地区一帯を灌漑する那留用水（八十三ha）、②江戸時代初期に設置された白鳥地区一帯を灌漑する大井用水（一〇八ha）、③戦国時代に設置された恩地とその周辺一帯を灌漑する恩地用水（一二〇ha）、④寛文四（一六八四）年頃に設置された大島下段・中津屋・剣地区一帯を灌漑する剣用水（三二二ha）です。なお、①④の用水路は、図中に示してあります。

(一) 成り立ち

剣用水の成り立ちは「推古天皇の時代（五九三～六二七）」と伝わり、寛文年間（一六六一～一六七二）に修理している現存・現役の用水として、県下で最古である」とも伝わっています。

剣用水は、長良川左支川牛道川（黒古川とも記す）の為真村（白鳥町為真）で取水し、大島村（白鳥町大島）、中津屋村（白鳥町中津屋）から剣村（大和町剣）に至り、長良川左岸沿いに展開する水田三二haを灌漑しました。

剣村は、木草の刈り取りや牛馬の放牧も可能な広い野原が藩の勤めによる開田で潰れることを嫌いましたが、藩は水田への肥料や牛馬への餌として重要な「木草伐採をどこでも許す」との条件で、村請による強制的な新田開発を行わせました。なお、木草伐採に関するこの条文に起因して、剣村



高鷲町と白鳥町の用水路分布

〈出典：『国交省国土調査・主要水系調査成果閲覧システム』〉

はしばしば周辺の村と木草伐採地について揉めていました。

(二) 長期に及んだ水争い

文政元（一八一八）年、用水路の上流側に位置する大島村が、村の西側の柳原地区の新田開発を藩に願い出しましたが、用水の流末に位置する剣村が反対しました。なおこの柳原地区では、大島村とその北の為真村間で境論争が発生しており、大島村と剣村との論争は文政九（一八二六）年まで続きました。

論争の原因は、剣用水より早く造られていた大島村の向島用水の水量が剣用水完成後に少なくなった事に、大島村が大いに不満を抱いたことに起因します。

文政（一八二六）年七月、大島村の開田地への灌漑用水を剣用水から取るか、牛道川から新たに新用水を拓くかの論争となっていました。用水改良工事の完成等に関しては資料不足で明らかではありませんが、剣用水は長良川上流地域最大の用水施設として維持管理されてきました。

(三) 現在の維持管理

明治以後も、用水路の維持管理に多大の資金と労力を注ぎ込んできました。昭和になつてからも十（一九一五）年・十九（一九四四）年等に部分的な改修工事が行われました。昭和二十八年（一九五三）年九月に「剣用水灌漑改良工事」が始まり、頭首工（中河原橋下の白鳥町為真字下新田）、および水路の抜本的改良工事に着手し、十二ヶ年の歳月を要して、総延長九、一五〇m

の改修工事が昭和四十（一九六五）年に完了しました。

また、剣地区では、用水路が整備される以前、農耕に使用した馬を洗う「洗い場」が小川などに設けられていました。



剣の「洗い場」
水路後方の平屋の家付近が剣の「妙見清水」。

剣の地元の人、鎌倉時代の東漸行にまつわる湧水「妙見清水」からの流れに付近の湧水が混じった小川が馬の「洗い場」であったと話してくれました。用水路の整備の際、剣地区の上剣と剣の二ヶ所に馬の「洗い場」が再現され、現在は耕運機等が洗われています。

なお、用水路を流れて来た枝葉が雪と絡んで用水を堰き上げ、水路から越流させないように、用水路には除塵機（大和町剣の国道脇）も設置されています。

剣用水の幹線水路は、平成二十四（二〇一二）年までにほぼ補修が終了しました。

三. 美並用水

郡上市最南端美並町にある福野新田の開発以前、福野は広い荒れ地で、「永荒一〇〇石」と言われた無年貢の地であり、現福野地区に含まれる新羽村と野尻村は、水田一石余の水不足の地でした。

高田関左衛門は、種村市左兵衛と共に水源を笱安の戸谷川に求め、寛文六（一六六六）年までに、堰堤（井堀）を築いて水路を開き、最大の



美並用水の経路

難工事であった福野隧道を完成させました。

(一) 堰堤（井堀）の変遷

長さ五十六間（現在の長さ九十一m）、高さ九間二尺（同じく十m）、底幅八間（約三十二m）の井堀からの用水は、南側山裾を下り、笱安愛宕山の山際から国道を横切って福野坂（切抜峠）下の岩山を掘り抜いた福野隧道を通じて、福野の荒地へ用水を供給しました。

なお、福野新田は領主が開発した新田であり、寛政七（一七九五）年の大規模な井堀修理の際、その用材費用や大工・人足賃を藩役所に要求しています。

その後も村人と藩は井堀をよく維持管理してきましたが、大正三（一九一四）年の白山用水（後の美並用水）完成に伴い、井堀は管理されずに野ざらしとなり、土砂堆積と堤体の老朽化が進みました。

しかし、昭和五十六（一九八一）年から平成五（一九九三）年にわたる「県営老朽ため池等整備事業」で、井堀は美並用水の補給水源として再利用することとなりました。

(二) 最大の難所、隧道の掘削

当時もっとも困難と言われたのは隧道の掘削でした。工事は、福野坂の山頂部に水平器を設置し、隧道の入口と出口の高低差

を測りながら双方から掘削したと記録されています。

この時の隧道中央部における二方向からの掘削坑のズレは、下流部にわずか十五cm程度であり、きわめて精度よく掘削されました。

現在、隧道を出た用水路は、大正十三（一九二四）年に耕地整理のため移転した白山神社の脇に流れ出ています。

高田のこの功を称え、三十年後の元禄十（一六九七）年、福野の白山神社本殿の前の記念碑に、「坂山穿山透清川、耘野耕荒關福田、居士曾依牢功浩、農家等茂億千年（農民等しく茂なること億千年）」と記した記念碑が建てられています。

（三）用水路の改修事業

大正元（一九一）年、現美並町白山地区一帯を受益地とする開田計画に伴い、大正三（一九一四）年三月に長良川左岸相戸地区で取水し、水路延長六、〇〇〇m余、受益面積七十五haの開田と水路事業が完成しました。しかし、河床低下に伴う取水不足や取水による堰流失等を経て、昭和十一（一九三六）年に現新美並橋（美並町深戸）に美並頭首工が建設され、ようやく取水量も安定しました。

ところが、

「白山用水」と呼称されたこの水路は屈曲が多く、素掘りのために水漏れがひどく、渇水期には水不足となり、二割程度の減収となっていました。

そこで、昭和三七（一九六二）年には、



美並頭首工（新美並橋下）
左岸側に取水口がある。

水路延長八、二〇四mで幹線水路の内幅一・三m、深さ七十cmの三面張りに改良されました。田畑一〇二haを潤したこの白山用水の改修と一部新設工事で以降、この用水路は美並用水と名を改めました。

その後、水路の老朽化による漏水の発生、さらに宅地化の進展や農作業の機械化等による水の需要形態の変化に伴い、昭和五十六（一九八一）年から昭和六十六（一九九一）年に掛けて第一期工事（団体営土地改良事業）、昭和六十一（一九八六）年から平成四（一九九二）年に掛けて第二期工事が行われ、現在は豊かな水が福野地区を潤しています。

なお現在の堰堤（井堀）は、面積九、三〇〇m²、貯水量三〇、〇〇〇m³で、さらに第三セクターが周辺整備事業として、宿泊施設、交流広場、野外ステージ等の「フォレストパーク373」を管理運営しています。



井堀ため池（フォレストパーク373）

■参考資料

- 『長良川』 岐阜大学長良川研究会 一九七九年
『白鳥町史 下巻』 昭和五十二年 白鳥町
『岐阜県土地改良史』 昭和五十八年 岐阜県農政部農地計画課
『木曽川水系農業水利誌』 昭和五十五年 農業土木学会
『大和町史 上巻』 昭和五十九年 大和町
『大和町史 下巻』 昭和六十三年 大和町

「第七回 全国禹王サミット in 海津市」が平成三十一年十月十九日（二十日）に開催されます。禹王は、中国で古くから治水の神として崇拝された人物で、全国の禹王が祭祀されている地域においてサミットが執り行われています。この機会に、木曽三川下流域の輪中における治水信仰について、連載し紹介します。

〔中国から来た治水神・禹王①〕
海津市歴史民俗資料館 水谷 容子

禹は、中国最古の王朝（夏王朝・紀元前二十一世紀～紀元前十六世紀ごろ）を開いたとされる神話時代末期の王です。「史記」をはじめ、中国の複数の史書や神話にその事績や逸話が収められ、功績を讃えています。以前は伝説上の人物と考えられていましたが、近年遺跡の調査などから実在を示す研究成果が認められ、中国での評価が見直されてきています。

中国神話によれば、禹は黄河流域の洪水を治めるため自ら山野を切り開いて淵を埋め、水路を開いて水を海へ流すなど各地で治水工事を行ったとされています。その間、家族を残して治水に心血を注ぎ、約三千年、家に帰る間も惜しんで事業を成し遂げたという伝承もあります。これらの功績が認められて先帝の後継者となった禹は、その後民衆のための善政を行い、約四百七十年続いた夏王朝の基礎を築きました。

禹王は別名を「文命」「大禹」「夏禹」となどという、治水の神として崇拝されるようになりました。秦（紀元前三世紀ごろ）の始皇帝が、禹王の伝説にちなんで浙江省紹興市会稽山のふもとに「禹碑」を建てて顕彰したほか、中国各地に残る地名や巨大な石像がその象徴とされています。また、孔子や孟子などの儒家家は禹を聖人や治水功労者として讃え、儒教における聖賢の一人に数えられています。

古くから中国大陸と関わりをもっていた日本では、交易によりもたらされた文物のほか、留学生や僧侶らが持ち帰った知識や文化が珍重されました。禹王崇拝もその一つです。十三世紀ごろ、当時水害が頻発していた京都の鴨川河畔に禹廟が建てられたと伝わっています。残念ながら十八世紀中ごろには既に滅失していたようですが、現時点での日本最古の禹王顕彰遺跡（川以下「禹王遺跡」といえます）。

近世以降、日本各地に治水の神としての禹王信仰が広まり、顕彰碑や祭祀壇、禹王の功績になぞらえた治水功労者の碑などが建立されました。その数は、肖像や地名などを含めて約一三〇件にのぼっています（二〇一七年九月現在）。範囲は北海道から沖縄県に及び、特に関東の利根川水系、濃尾平野の木曽三川流域、大阪や京都の淀川水系に多く分布しています。これらの地域には、長大な河川が比較的低位な平野部（一部丘陵地を含む）を流れる水害常襲地域であったという共通点があり、河川の合流部や水害の恐れがある場所に禹王を祀り、水害軽減を祈りました。

「禹王川治水神」が広く認知されていた背景の一つに、徳川幕府が儒学（儒教）を柱とした文治政策を進めたことが挙げられます。大名や学識者をはじめとして、儒学思想の浸透とともに中国起源の治水神・禹王が日本固有の神々と並んで受容されていきました。さらに、江戸時代中期以降、新田開発や自然災害によって全国的に水害が増加しており、人心の拠り所となり得る神を具現化した結果、多くの禹王遺跡の成立につながったとも考えられます。

木曽三川下流域には、禹王遺跡または禹王信仰に関わる史料が十以上現存しています。次号では、当地域における禹王信仰について紹介します。

～次号へつづく～



中国・鄭州市黄河遊覧区の禹像

■参考資料

- 『治水神禹王をたずねる旅』
大脇良夫／植村善博 編
二〇一三年 人文書院

木曽川に育まれ、水と戦ってきた 歴史の町 笠松町

笠松町歴史未来館 学術専門員 高木敏彦



笠松みなと公園に復元された川灯台と道標

笠松は、寛文二（一六六二）年から幕末まで江戸幕府の直轄地として郡代陣屋が置かれ、幕府支配の重要な位置にあった。また明治維新後には、明治六（一八七三）年まで笠松県庁・岐阜県庁が置かれた政治の中心地でもあった。

一方で、江戸時代からは木曽川の舟運の中継地として栄え、美濃・飛騨はもとより全国の物資の集積地として賑わい、また美濃と尾張を結ぶ名古屋街道の往来人馬問屋を置く交通の要衝として発展してきた。

一 笠松町の概要

岐阜県羽島郡笠松町は、岐阜県の南部に位置し、岐阜市・羽島市・各務原市・岐南町に隣接している。また、木曽川をはさんで愛知県一宮市と接している。笠松町は、木曽川右岸に沿って带状に広がり、町の北部を流れる境川と南部の木曽川に挟まれた輪中地帯の一部でもある。

町内には名古屋鉄道が通り、二つの駅がある。岐阜と名古屋を結ぶ名古屋本線の笠松駅、もう一つは岐阜とJR東海道新幹線の岐阜羽島駅を結ぶ竹鼻線の西笠松駅である。毎日の通勤通学客の足となり、多くの利用者がある。名古屋までは三十分圏内であり、岐阜と名古屋のベッドタウンでもある。また、道路網も整備され、名神高速道路や東海北陸自動車道のインターチェンジへも短時間でアクセスできる位置にある。

平成三十（二〇一八）年一月一日現在の人口は、二二,三四〇人、一平方kmあたりの人口密度は、約二,一六九人で、県内有数の人口密集地となっている。

二 木曽川とともに歩んだ歴史の町

太古の時代、濃尾平野は伊勢湾が内陸部まで迫り、気候の冷却化に伴って現在の地形となった。昭和十二（一九三七）年に木曽川にかかる橋の橋脚を建設中に、地中十五mからマガキの化石が発見された。

このことから、笠松町を含む濃尾地方一帯が海水面下にあったことが分かる。このように、笠松町は低地帯であり、木曽川が山間部から流れ下る中間地にあることから、過去にはたびたび水害を被る土地柄であった。

天正十四（一五八六）年の大洪水によって、



港跡に残る石畳（県史跡）

木曽川の流路が大きく変わり、今より北部を流れていた木曽川が現在の流れになった。もっとも、川の流路は幾筋にも分かれていたことだろう。これにより村々が流され、もとは尾張国葉栗郡であったこの一帯は、美濃国羽栗郡となった。濃尾両国に同様の地名が出現する契機となる。

笠松が町場を形成するのはこの後のことで、低地の開発が進められることになるのは、江戸時代に入ってからのことである。岐阜町と名古屋を結ぶ名古屋街道が整備され、人荷が行き交い、笠松はその中継地として栄えるようになった。特に、元和三（一六一七）年に往来人馬問屋が置かれると、往来が盛んになった。

笠松は、将軍家への献上品である真桑瓜や鮎鰯の宿次地として重要度が増した。寛文年間（一六六一〜）には、一か月のうち四と九のつく日に六斎市が立ち、六日間の定期市が開かれた。

これに近在の人々が集まり、集落が形成され、笠松発展の嚆矢となったのである。

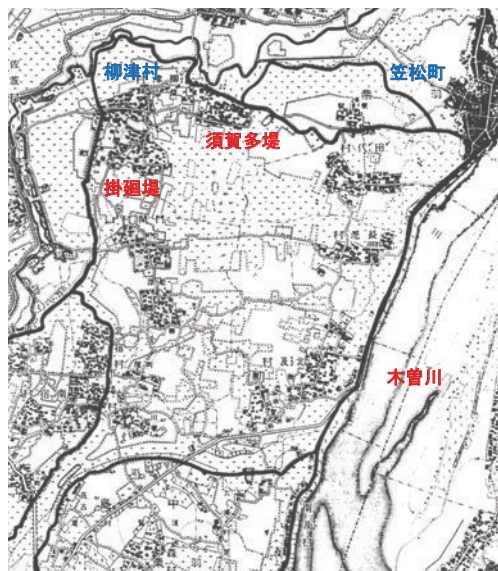
一方、政治的に笠松が存在意義を高めることになったのは、美濃郡代笠松陣屋の設置である。関ヶ原の戦い以後、徳川家康は美濃を政治・経済・軍事の要衝として、各地を幕府直轄領にした。大久保石見守長安が岐阜町に奉行所を置いたことをはじめとして、以後岡田将監善同・善政父子が引き継ぎ美濃の支配を進めた。

善政の時代に徳野陣屋（可児郡徳野）の出張所を笠松に置いたことを契機に、第三代郡代名取半左衛門長知は笠松に陣屋を移した。寛文二（一六六二）年のことである。木曾三川中流部の水害と堤防などの修復には、笠松に陣屋を置いたほうが利便性が高かったからである。

三、笠松湊の発展

綿織物である美濃絹や酒造業などの商工業が盛んとなっていた笠松は、港町を中心に発展していた。明和・安永年間（一七六四～一七八一）に笠松を訪れた岐阜町の漢学者が書き記した紀行文には、「笠松は郡代の修める所、数百の商家が居す、ここにおいて勢州交易の商船、日々往来す、故に商家は最も鹹鹺（塩乾物や白酒）に利す」と記している。

文政十二（一八二九）年の記録によれば、諸荷物問屋 小川弥平治の船着き場には尾張の蟹江・一色や伊勢の桑名方面から塩・生魚・海産物が回送され、「当時取継荷物多数御座候」（差出帳）という賑わいであった。この当時、笠松には三軒の諸荷物問屋があった。



明治中期以前の松枝輪中。黒い実線が輪中堤である。

次（右）の絵図（右下図）は、「柴田善之丞支配所羽栗郡田代村」の村絵図である。柴田善之丞は、天保七（一八三六）年から嘉永四（一八五二）年まで郡代を務めた。笠松村から柳津村にのびる堤（黒い実線部）は、「須賀多堤」と呼ばれたが、この堤における破堤の修復が、上郷と下郷の村々の対立が生じる原因になった。

悪水が下流部に落ちにくくなったことによる争いであり、高嶋久右衛門家には、この争論についての史料が残されている。

四、輪中と堤の修復

笠松町一帯は低地であるがゆえに、水との戦いを強いられた地域である。

『ふるさと笠松』には、慶長年間から明治元（一八六八）年までの二七〇年間に八十八回の風水害などが記されている。木曾川の堤防が大雨によってたびたび決壊し、甚大な被害を被った。一例をあげれば、寛政十（一七九八）年四月の大洪水では、長良川・木曾川・境川などが破堤し、前代未聞の大水になったという。

この洪水で、木曾川・長良川の堤防決壊箇所が三三〇か所に及んだ。幕府は、御手伝普請として美濃国に直接関係のない諸藩九藩に命じ修復にあたらせた。このとき、笠松では米野村二か所、江川村・無動寺村・奈良津新田・円城寺村各一か所の修復工事が行われた。

笠松村北部の境川左岸は増水すると、しばしば氾濫する地域であった。堤らしい堤もなく、土盛りさえも認められないなかで、天保期にいたってようやく掛廻堤の築堤が行われた。（左上図を参照）



田代村絵図（美濃郡代笠松陣屋文書）

弘化二（一八四五）年七月、笠松村・徳田新田の村役人九名連名で、堤方役所に提出された「願書」には、「天保六（一八三五）年六月の出水で柳津村地内の掛廻堤と埴樋が切れ、修復を急ぐようにと近隣の村々より催促があった。しかし、困窮する私どもの村ではその修理費が工面できなかったが、漸く目処がついたので、取りかかりたい。しかるに、近隣村々の状況をみるに、未だ切所の修復が済まず、このままでは万一出水したら当村の作物が被害を受けるので、早急に築堤を急がせてほしい。」と、上郷との争論が続いた。結局、各組合で修復費を出し合い復旧はなったものの、埴樋伏替えを巡って争いは明治初年まで続いた。



笠松・徳田新田村絵図（天保9年）
赤い線が、名古屋街道である。
（美濃郡代笠松陣屋文書）

五、将軍家への献上鮎鮓と宿次史料

元和三（一六一七）年、尾張藩は将軍家への鮎鮓献上を制度化し、毎年江戸への鮎鮓献上が始まった。元和元（一六一五）年、徳川家康が大坂の戦いに勝利した後に岐阜町へ立ち寄り、長良川の鵜飼いの鑑賞と鮎鮓を所望したことによるものである。

鮎鮓とは、塩漬けにした鮎にご飯を詰め、桶に漬込んでおくと、ご飯が発酵して酸っぱくなる「なれずし」のことである。

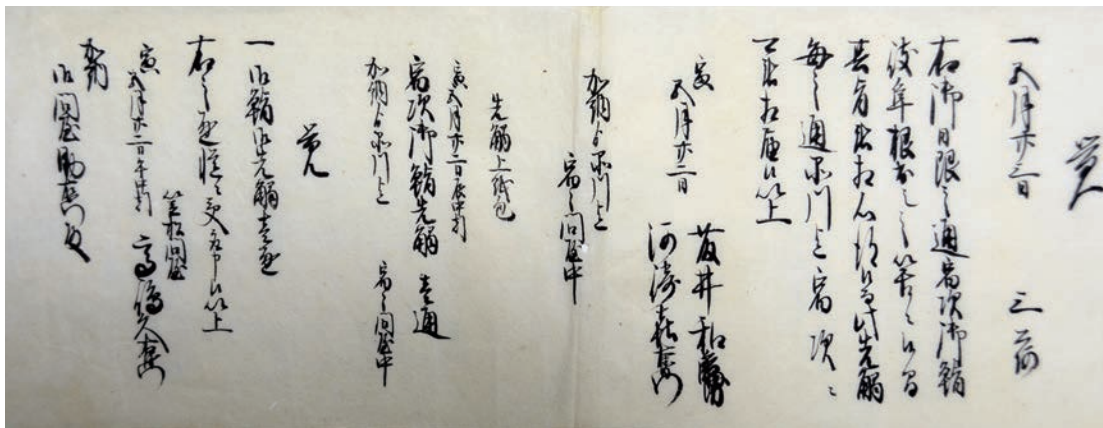


桶に詰められた鮎鮓の模型
（笠松町歴史未来館）

笠松町歴史未来館が所蔵する鮎鮓献上に関する史料が残されてきたのは、笠松で往来人馬問屋を務めた高嶋久右衛門家である。高嶋家は幕末になって村役人を務めた家であるが、この家に残されてきた宿次史料について見てみたい。大別すると、

①「鮎鮓御三荷継立帳」（天保十三（一八四二）年五月、嘉永三（一八五〇）年、嘉永四（一八五二）年五月）

②「御船役人足帳」(天保三(一八三二)年五月
嘉永三(一八五〇)年)
③「覚」綴(一宮宿からの報告書)
である。
笠松村の村役人は、代々笠松八人衆と言わ
れる村の開発に貢献した家が村役人を務める
習わしで、高嶋家は株を譲り受け取得したこ



鮎船御三荷継立帳 天保 13 年 5 月

とにより、天保年間以降に庄屋を務めた。

天保十三(一八四二)年の「継立帳」をみ
ると、鮎船を江戸まで継ぎ立ていく仕組み
が理解できる。問屋の主である久右衛門が几
帳面に触れ書きを書き写した(左上写真)。

これによると、寅年(天保十三(一八四二)
年)五月二十三日、幕府老中信濃守(松代藩
主真田幸貫)より岐阜の鮎元へ「鮎船を江戸
尾張藩邸まで間違いなく届けよ」との指示が
届くと、鮎元は鮎の「出荷」を準備し、同時
に品川までの各人馬問屋へ先触れを出し、受
け入れの体制を整えることを伝えた。

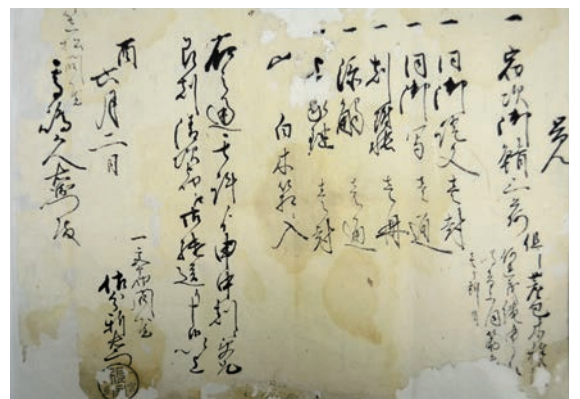
「御三荷」出立の準備が整うと、先触人足に
よって各問屋宛に「まもなく鮎船御三荷が到
着する」旨が宿次される。受け取った問屋は、
次の宿に同様の先触を発し、先触が無事届い
たことを前の問屋へと報告しなければならな
い。一刻を争う問屋の仕事は実に慌ただしい。

次に「御三荷」の本隊が到着すると、荷を
あらため、異常の有無を確認する。そして準
備していた人足が一宮へと出発し、約十kmの
道のりを、十五人の人足が交代しながら運ん
だ。先導役の「宰領」、老中からの指示書や刻
附帳、鍵の入った白木の箱をかつぐ「箱人足」、
そして鮎船を運ぶ「御三荷人足」の総勢十五
名である。

「覚」(右下写真)を見てみよう。これも「先
触」同様一宮宿の問屋から高嶋家に届いた「御
三荷到着」の報告書である。「一宿次御船三荷」
の下部に書かれた但し書きは、到着した荷の
状態を書き記したものである。遠距離を人が
担いで運ぶだけに荷崩れが生じる。いくらか
の補修を繰り返しながら運んだことだろう。

次に白木箱に入れてあるのは、老中からの
指示書、三荷の鍵、荷の受け渡し時刻を記し
た「刻附帳」。これらが各問屋によって引き継
がれる。

この覚書は、「右之通其許より申中刻受取、



「覚」(西 6 月 2 日 一宮宿より荷をあらため、即刻清須宿へ出立した旨を笠松宿へ伝える報告書)

即刻清須宿へ御継送りの申候」と記した一宮宿
問屋から笠松宿問屋への報告文書なのである。

高嶋家に残された、一宮宿から笠松宿へ届
いた「覚」(報告書)綴りからは、毎回同様の
ことが繰り返されることはいえ、誤りが許
されないことが窺える。老中から命を受けた
將軍家への献上品だけに相当な神経の使いよ
うである。

一方、荷を運んだ人足に思いをはせてみた
い。鵜飼のシーズンと言えば、夏。旧暦五月
の鵜飼の始まりが、鮎船献上の始まりである。
人足役を担う農民たちにしてみれば、これか
らが農繁期なのである。わずか一日とはいえ、
人手が奪われる。

天保期の笠松村の人口は、およそ家数五〇
〇戸、人口二、〇〇〇人。毎回十五人程度の人
足を四か月で十回調達することは至難だった
ことだろう。現に、「人足帳」には「〇〇姉」、
「〇〇妹」、「〇〇後家」など女性の名が記され
ている。果たして、一宮まで荷を担いだか否
かは不明だが、男手を出せない家もあったこ
とは想像に難くない。

江戸まで五日かけ、およそ四〇〇kmの道の
りを昼夜兼行で運ぶ人足の苦労が偲ばれる。
毎年、旧暦の五月から八月の農繁期のこと
である。人手がもつともほしい時期に、人足と
してかり出される農民たちの思いは如何ばか
りであつたのだろうか。

元和三(一六二七)年に始まった尾張藩の
鮎船献上は、文久二(一八六二)年をもって
終わつた。実に、一五〇年も続いた。

現在、笠松ではこの歴史を再現しようと、
町の有志たちの努力で「鮎船街道ウォーク」
と銘打ったイベントが、十二年続く。人足役
を担うのは、町の小中学生である。

毎年九月はじめ、三小学校六年生が鮎船献
上の歴史を学び、参加を希望する小中学生二
十名が約一・五kmの道のりを江戸時代の出で
立ちで歩く。そして、町の料亭が復元した「鮎
船」が見物客に
も振る舞われる。
江戸時代の味と
は違つてあろう
が、毎回人気で
ある。

川と共に歴史を
紡いできた笠松町
の名物イベントと
して、これからも
続くことを願う。



12 年続く「鮎船街道ウォーク」の様子

■参考資料

- 『高嶋久右衛門家史料』(笠松町歴史未来館所蔵)
- 『美濃郡代笠松陣屋堤方役所文書』(岐阜県歴史資料館所蔵)
- 『ふるさと笠松』昭和五十八年 笠松町
- 『岐阜県史』昭和四十三年 岐阜県
- 『岐阜県の地名』一九八九年 平凡社

おあむ物語 (大垣市郭町)

集まった子どもたちに、おあむ様がむかしの話をされました。

私の父は山田去暦といい、石田治部少輔殿に奉公していましたが、治部殿ご謀反の時、家族とともに大垣城に籠りました。その後、家康様の寄せ手の衆が大勢で城を囲み、いくさが夜昼なく続きました。

私と母は、家中の内儀、娘たちと一緒に天守に居て、鉄砲玉を鑄ました。また、討ち取った敵の首に札をつけて天守に並べ、毎夜これにお歯黒を付けました。これは、昔はお歯黒の武士は身分が高いので、恩賞のため施しました。

ある日、寄せ手より鉄砲が撃ちかけられ、もはや今日にも城が落ちるのではと騒ぎになりました。鉄砲玉が飛んできて、十四歳になる弟にあたり、そのまま死んでしまいました。むごいことを見てきました。

城は翌日に攻め落とされるということで、私たちも明日はないと心細くなっておりましたら、父が密かに天守に來られました。父は、私たちをつれて、北の堀わきより、はしごをかけて、つり縄でつり下げ、そこからたらいに乗って堀を渡りました。城を離れて五、六町ほど北へ行つたとき、母が突然、腹が痛くなり、娘を出産しました。大人たちは、その場で田の水でうぶ湯をつかい、引きあげ、衣服の裾に包みました。父は母を肩にかついで、青野が原のほうへ落ちのびました。父は母を肩にかついで、怖いことでした。南無阿弥陀仏。

参考

『おあむ物語』(復刻版) 岐阜県郷土資料研究協議会

『おあむ物語』は関ヶ原の合戦の時、大垣城に立て籠もった石田三成軍の一員として戦火を体験した女性・おあむが、後日、子供たちに語り聞かせた物語で、徳川家康の激しい攻撃のもと大垣城から脱出するさまが臨場感をもって描かれています。おあむら一行が脱出する際に、天守の西側にあった腰曲輪の松の木「おあむの松」に縄をかけ、それを伝って内堀に降り、たらいに乗って逃げたとされています。大垣城には樹齢三百年ほどの大松がありましたが、第二次世界大戦の直前に枯れたために植え継ぎし、昭和四十四(一九六九)年七月十日に二代目「おあむの松」の命名式が催され、解説板が設置されました。



KISSOは、創刊号からの全てが木曽川下流河川事務所のホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

『水門川』<提供：大垣市役所>

水門川は大垣と桑名を結ぶ運河です。永禄4(1561)年に大垣城主氏家直元が、城池改築の際に開削したと伝えられています。明治16(1883)年には大垣と桑名間に定期汽船が開通し、大いに栄えました。今日では、美しい住吉燈台が往時のおもかげを偲ばせています。

編集後記

昨年5月の皇太子殿下行啓を記念して、船頭平閘門に関わるコラム「船ちゃんのコぼれ話」の掲載を始めました。

ふね
船ちゃんのコぼれ話 第二話

「船頭平でひっそりと見守るお地蔵様」

船頭平閘門のデ・レイケ像の後方で、ひっそりと佇まれているお地蔵様がお見えになるのをご存知でしょうか？明治改修工事の頃、現在の本曾川と長良川の背割堤にあたる立田村葛木の地に、工事のための葛木出張所がありました。その頃、この近くの新本曾川として川底に沈んだ地での工事中に、人骨が出て来たことがありました。どうやら立田村二老の墓地跡であったようですが、職員らは鎮魂を心に念じつつもそのまま埋めもどし工事を完了させました。

しかし、昭和26(1951)年、葛木出張所横の新長良川を渡る森下渡船の事故で、出張所の職員1名を含む4名の方が亡くなりました。さらにその後に工事トラックの横転事故、水難事故・・・と不幸が続いたそうです。

時が少し経った後、立田村二老にて合同供養が営まれ、お地蔵様をそこに建てようとしたのですが沢山の方にお参りしてもらえる場所の方が良いという事で、昭和44(1969)年に、墓地の霊と不幸に遭われた方々の鎮魂、そしてこの地の安全を祈願し、船頭平の地に建てられたとのことです。

今回お地蔵様の取材中、森下渡船の事故の後、葛木出張所のそばに台座の無いお地蔵様があったとの情報もありましたが、今はお地蔵様も出張所もありません。もしやこちらに歩いてみえたのかもしれない。



『KISSO』 Vol.109 平成31年1月発行

編集 木曾三川歴史文化資料編集検討会(桑名市、木曾岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか)

発行 国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL (0594) 24-5711 ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>